

勅使門

勅使門は南庭への入り口にある門であるが、天皇またはその使いの者のみが通る門なので、滅多に開かれることはない。門そのものは古くからここにあるように見える。実際、ここには天皇の随行者の出入りのための門が古くから建っていたのだが、1887年の火災で焼失してしまった。現在の門は1913年に京都の職人、亀岡末吉（1865～1922年）の設計により建てられたものである。この門には日本的な要素と中国的な要素が混在しており、杉皮葺きの屋根や、4つの柱に支えられた門の下層部分を形成する唐代の様式の破風（唐破風）が特徴的である。破風には、自然をテーマにした非常に装飾的な透かし細工やレリーフ彫刻が施されており、鳳凰（復活と再生を象徴する生き物）の尾羽と牡丹唐草文が組み合わせられたデザインがあしらわれている。この門は皇室の訪問のみのためにつくられたものだが、毎年10月には近くの福王子神社からの祭礼の行列もこの門を通る。